

噓物語

主義

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フローレス・アーネスト

怪異の専門家であるが吸血鬼である。性格は比較的温厚だ。忍野や鍵縫、貝木たちと
は知り合いで一度鬭つた事もある。

キスショットの生みの親である者とも知り合いの関係にあるらしい。もう千年近く
生きている。

これはそんな彼があの町で色々な人と出会う物語。
時系列としては偽物語のかれんビーぐらいのお話です。

伍話 肆話 參話 武話 壱話

目

次

23 19 13 7 1

壱話

人間の頃の僕が今の僕を見たら一体何を言うんだろうか。軽蔑するのだろうか、それとも尊敬するのだろうか。答えなど分かるはずもないが考える事をやめることはない。そして僕は今日も生きている。

僕という生物を語る上で欠かせないことは…………吸血鬼と言うことだろう。僕という生物をその言葉無しに語るのは難しいだろう。

僕は吸血鬼であり何千年という時代を生きてきた。人類がどのように今の現状にまでになつたのかも見てきた。まあ、人類以外にも怪異も見てきた。代表的な怪異で言うのならばそれはキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードだろう。あいつがそう名付けられた日から知っている。それはあいつの名付け親であるデストピア・ヴィルトウォーズ・サイドマスターと知り合いだつたからと書いておく。

ハートアンダーブレードとは彼女が吸血鬼になつた日から会つていなか。だが、風の噂では何度か耳にしたことはあつたりした。

ここで話を元に戻し今、僕は怪異の専門家として人間社会で働いている。吸血鬼である僕が怪異の専門家として働いているのも少し……かなりおかしい気もする。

そして現実に話を戻すことにしよう。僕がこの町に来たのは忍野メメが町を出るときと入れ替わるようにだ。

忍野メメとはあいつらが大学の時に出会つた。怪異の僕があいつらのような専門家に会つたら真っ先に殺されそうだと読者全員が思うことだろう。確かに出会つてすぐは闘いが起こつた。臥煙伊豆湖、影縫余弦、貝木泥舟、忍野メメらVS僕。多勢に無勢だつたが別に闘いが不利になる事は無かつた。結果的に言うと闘いに終わりが来ることは無くお互に疲れて倒れるまで闘いは続いた。

一対一なら確実にやれたが相手も人数が人数だ。こいつらを全員、皆殺しにするのは何千年生きてきた僕としても骨が折れるのは火を見るより明らかだつた。

相手方としても殺せないならせめて手の届く範囲に僕の事を置いておきたかったん

だろう。そして言わなくとも分かると思うが僕は専門家になる羽目になってしまった。これが良い事なのか悪い事なのか分からぬがこうなつてしまつた以上仕方がない。まあ、僕が言う事を聞くことがある訳でも無く僕は臥煙伊豆湖たちから逃げながら生活をしている。あつちもほとんど放任している感じだから追い回したりしてくる事もないから逃げているとは言わないのかもしれない。

今、俺は公園のベンチに腰を下ろしながら空を見上げながらこれからの事について考えている。僕がこの町に来てからまだ一週間ぐらいしか経っていない。だけど案外、僕はこの町が気に入った。色々な町を見て回つたりしたけどその中でも上位に入るくらいこの町は良い。いつそこの町で暮らすというのもありかもしれないと思つてしまうほどにだ。だが、仕事の方もあるからそんな簡単に一つのところに留まる事はできないし：それ以外にも僕が一つのところに滞在すると……いや、これについては別にいいか。

「何しているんですか？」

後ろからそんな感じの声が聞こえてきた。今、僕が座っているベンチの周りには誰もいないという事は僕に向かつて話しかけてきたのか。

「…ベンチで座っているんだ」

僕は後ろを振り返りながらそう言つた。振り返つてみると話しかけてきた人物が鮮明に見える。女子高生か女子中学生といった感じの女子で服は和装だった。そして何より満面の笑みで話しかけてきていた。

「まあ、そうですけど…。私が聞いているのはこんなところで何をやつているんですか？」

話しかけてきた女子は質問をはぐらかされるとでも思つたのか少し不機嫌な感じで僕に向かつて言つた。何をしていると言われても何もしていないんだけど…。

「…。ただ、座つているだけだ。目的があつてこの場に来たわけではないんだ」

「なんですか」

「そういう君はここに何しに来たんだ？」

さつきも言つたがここにいるのはこの女子と僕だけだ。この女子が遊具でも遊びに来たようには見えないしな。

「彼氏との待ち合わせです」

さつきよりも何十倍も良い笑顔で女子はそう答えた。この女子にとつてどれほど彼氏と会うことが楽しみなのかすぐにわかるほどの笑顔だな。

「それは楽しみだな。君にとつて今日が最高の日になることを願つているよ」

「ありがとうございます！」

「ああ、じゃ僕はそろそろ行くとするよ。それじゃまたどこかで会えたらね」

僕はベンチから立ち上がり公園を去つた。本当はもう少しあそこで暇を潰したかったところだけどこれから彼氏が来るなら嫉妬をしてしまったりしてしまうかもしけな

いからな。速やかに立ち去り今はこれからどこに行こうかなと考えながら頭の片隅でさつき出会つた少女の事を考えていた。

面白い出会いをしたものだな。まさか、不死鳥と会うとはな。偽物だがやはり人間の姿でのような笑みを浮かべていると普通の人間に映つてしまうな。影縫が僕の事を見たら「甘い、甘すぎる」とでも言うのかもしれないが僕は別に良いと思う。確かに偽物かもしれないけど……あの少女の身内からすればあれが本物なのだ。それは壊すような真似をしてまであの不死鳥を退治しようとは思わないな。それにさつきの感じを見る限りかなり幸せに生きているようだしな。

僕は適当に町を徘徊しながらそんな事を思つていた。

式話

不死鳥と会つてから暫くが経ち……僕は臥煙から呼び出しを受けて浪白公園にいた。あの人の呼び出しに受けないとかなり面倒な気がするが故にいつも従つてゐる。従わないという選択肢がないわけではないが……まあ、面倒な事が起ころのはごめんだからね。

臥煙が来るまでもう少し時間がありそだから……自分のこれからについて考えるにしよう。

この町に滞在できるのも頑張つて後、一年というところだな。一年は……盛つたかも。半年と二か月ぐらいが限界かもしれないな。僕がこの場に滞在しすぎるとこの町は靈的に不安定になる。だから絶対に僕は一つのところに長い滞在はしない。それは臥煙たちからも言われている。

「物ふけつているところ悪いけど……アーネスト」

いつの間にか僕の隣には……臥煙伊豆湖……その人がいた。まるで気配も無く

この女はいつも近くまで来る。だから僕はこの女の事が嫌いだ。だつて人が物ふけつている姿を観察してすぐに声を掛ける事をしないのだから。

「… 何ですか？」

「まあまあ、君も私と長く話をするのは嫌だろ？」

「そうですね。あなたと話していると疲れますから」

「そうだろう、そうだろう。それでは单刀直入に行くとしようか。私もあまり回りくどいような言い方をするのは得意ではないからね」

僕に背を向け一歩、一步と離れながら臥煙は言う。この人の話で僕の利益になるような話や僕の得になるような話は今まで一度も無かつた。

「君にはこの町である男の監視をして欲しい」

「え…」

自分が思っていたよりもそうな仕事内容に驚いてしまった。だつて普段は誰かを黙らせておけとか仕留めるとかなのに今回は監視だ。誰かを傷つけないような仕事を久しぶりかもしれない。

「監視だ。私が言う人物を暫くの間監視をして欲しい。そしてこの人物が暴れ出したり何かがあつた場合には容赦なく首を飛ばしてくれて構わない」

本当にこいつは僕より残虐非道だ。吸血鬼の僕が言うのも何だけどこいつは僕より吸血鬼に向いている人間だと思う。

「はあ～やつぱり只の監視だけじゃなくて…それは遠回しに殺せと言っているんじやないか？」

「いや、最初にも言つただろう。私は回りくどいような言い方は嫌いだ。正直な事を言つてしまふなら殺せと言つてしまつても良いんだけどメメがそれは許さなそだかね。ここはまず、監視にしておこうと思つたわけだ」

これはメメが許さないだけの理由じゃないな。メメだけだつたらこの人は強行突破をするように殺してしまふだろう。だから多分、何か殺せない原因があるのだろう。

「分かった。それでその人物の名前と住まいは？」

「名前は阿良々木暦。住まいはこの紙に書いてある」

僕は臥煙から紙を貰い確認するとここからそれほど遠く離れていない事に気付いた。これなら臥煙との話が終わつた帰りにでも見に行くか。やっぱり監視をする以上相手を知らなくてはならないしな。

「それで何でこいつを監視するんだ。さつきメメとも言つていたが……」

「そうだね。君にも話しておこうか。この阿良々木暦という人間は三月頃に吸血鬼になつた。キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレイドの眷属として」

あいつが眷属を作つたか。風の噂でこの町の周辺に来ているという事を聞いたがどうやら本当にこの町に来ていたようだな。

「問題なのはキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレイドが阿良々木暦の影の中にいる。全盛期の力は出せないにしてもいつその力が戻るか分からぬ現状で

誰の監視もつけないのは問題だ。もし、普通に居れば討伐も考えるが影の中にいるんじやそれは出来ない。だから一応、監視をすることに決めた。そして誰を監視役にするかに関しては…迷うことなく君しかいない。もし、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレイドが全盛期の力を出したとしても対処が出来る君しかいない」確かにあいつ程度の力であれば抑えるのは容易い。これでもあいつより長い間この世界で生きてきているからな。

「それで阿良々木暦を監視すると」

「そう。他にも色々と理由はあつたりするけど今はまだ話すときじゃないと思うから話さない」

「分かった。それじゃ僕は行くとするか

この人と長い間いるのはさすがに嫌だし仕事だけ分かればこの人といる理由もないしな。僕は臥煙に背を向けた状態で阿良々木暦の家へと歩みを進めようと一步を出した瞬間に後ろから声が聞こえた。

「そう言えば、言い忘れたけどそろそろこの町に影縫と斧乃木が来ると思うから精々仲良くしてくれ」

僕は聞こえない振りをして去つた。

参話

僕は臥煙から貰つた紙を元に… 阿良々木家へと着いた。外見は決して普通の一軒家のようにも見えるが… ここに関し対象が住んでいるのか。今日は家の確認をするぐらいで良いんだが僕がちょうど阿良々木家を通り過ぎようとした時に… 後ろから話しかけられた。

「何か… うちに用ですか？」

僕が振り返ると話しかけてきた人物は… くせつ毛が目立つ30代ぐらいの女性だつた。僕の方を睨んでいるのかと思つてしまふほどの眼力で見て いる。今さつきこの人は「うちに用ですか？」と僕に聞いてきたはずだ。と言うことはこの人は阿良々木家の一員の一人という事か。もしかしたらこの人が阿良々木暦なのか…。顔写真ぐらい臥煙に貰つておけば良かつた。阿良々木家が一体何人構成なのか分からぬけど… 面倒だな。

「いや… 阿良々木暦さんと言うのはあなたですか？」

まずは本人を特定しないと話にならない。この人が阿良々木暦なら楽で良いがもし違うのであれば顔ぐらいは憶えておかないと。

「いえ違うわ。暦に何か用ですか？」

「はい。学校の事で伝えたいことがありますまして」

「そういう事なら少し待つてなさい。暦を呼んできてあげるから」

この人が呼んでくるまでの間に僕は適当なところに身を隠して阿良々木家の玄関の方を視線を向ける。態態、自分の顔や正体をバラすような事をする必要はない。僕は只、顔の確認をしておきたいだけだからな。

少し待つと閉じていた玄関の扉が開き……さつきの人と同じようにくせつ毛をしている男が出てきた。見た感じ……だと高校生とかか。そしてその男から600年ぐらい前に会つたきりの吸血鬼の匂いもしたから確実にあの男が阿良々木暦だろう。

そうか……あの男が僕の監視対象か。つてことは今さつきのはこいつの母親と言つたところだろうか。

まあ、今日はこれで完了したし撤退するとしますか。

僕は阿良々木家からの帰りに僕はついでだからと想える場所に向かう事にした。その場所とは忍野も寝床にしていたという学習塾跡だ。この町に来てから一度も学習塾跡には行つていなかつた。どこにあるのかとかは知つてゐるけどあそこを訪れる機会がなかつた。

何で忍野の奴があそこを寝床にしたのかは知らないが……あそこは何かと拠点にはしやすい。これからは阿良々木暦の監視をしなくちゃならない。監視となると一晩中、阿良々木家に張り込む事になることもあるだろう。そうなると今、泊つてゐるホテルからじや無理がある。だけどあの学習塾跡だつたら阿良々木家との距離もそこそことだ。

そんな事を考えていると僕の端末が小刻みに動き出した。誰だと思つて端末を耳に当てる

「久しぶりだな：」

「これは珍しい事だな。君の方から僕に電話を掛けてくるなんて……明日は嵐でも来るのかな」

この男は誰かと自ら連絡を取る何て事をほとんどしない。仕事関係となればやるだろうが今、現在こいつと僕の間に仕事上の付き合いはない。臥煙からもこいつの話は何も聞かなかつたが。

「ああ、確かに。俺の方から電話を掛けなくてはならないとはな。こちらとしても最悪だ」

「それで君の方から連絡をしてくると言うことはそれなりの理由があるんだろう。その要件を手短に話してくれ」

臥煙からの命令もあつたりするからこれ以上、面倒な事は勘弁なんだけどな。一人で背負いきれる許容量というものが吸血鬼の僕にもあるという事をあいつらに教えてやりたい。

「そうだな。長電話は勘弁だからな。お前に少し頼みがある。今日の午後七時に駅前のファミレスで待つている」

本当に手短だが……こいつはどこの駅前を指しているんだ。

「お前と僕では今、いる場所が違うだろう。お前はどこにいるんだ？」

「俺は……」

こいつが言つたのは僕が今いる町だつた。こんな偶然つて起くるものなのか。いくら何でも集まりすぎだろ。こいつの誘いを断ると後々、面倒になるかもしれないしこいつに恩を追つておいて損はないだろうしな。

「仕方ない。それじや午後七時に。貝木」

肆話

着くと予想以上に廃墟と化していた。別に潔癖症とかじやないから生活は出来ない事はないけど……ここまで廃墟と化しているとはな。予想よりも荒廃が進んでいる。だけどまあ、生活できない感じではないからいいか。

一応、学習塾跡の中を探索したが誰かが住んでいる痕跡はなかつた。ここに住んで誰かと鉢合わせになる事はないらしい。まあ、こんなところに住んでいるのは僕のような仕事をしている奴か物好きな人以外はいないだろうからな。

「まさか……本当にお主だつたとはな」

僕は目の前にいる金髪の幼女のような吸血鬼にそう言われた。僕としては何でこいつがこんなところにいるのかが疑問なんだがな。さつきまで阿良々木家に居たはずだ。それにここには阿良々木暦がいない。こいつは影にいるんじやなかつたのか……。

「そうだな。僕もまさか生きてているうちに君にもう一度会う事になるとは思わなかつた

よ

「それはお互い様じやのう。まさかと思つて匂いを追つてここまで来たがどうやら儂の鼻は間違つていなかつたようじやのう」

それにしても全盛期とは程遠い、今の彼女。誰かに力を奪われているとは言うことだろう。臥煙が心配するほどではない気がするが…………この程度なら僕じやなくてもどうにかなるだろう。まあ、こいつが何らかの拍子に全盛期の力を取り戻してしまつたら話は別だけど………

「……それにしても僕の正体を確かめるだけならそろそろご退場を願う。君と思い出話をするために僕はこの町に来たわけじやないからな」

「じゃあ、何のためにこの町に來たんじや？」

「その理由を君に言う義務は僕にはないよ。それに君も僕にあまり関わらない方が良いと思うよ。君は大人しく阿良々木暦と一緒に暮らしていればいいんだよ」

こいつに僕がお前らを尾行する事をバレるわけにはいかない。もし、バレでもしたら僕は臥煙から何を言われるか分かつたもんじやない。まあ、もし怒られそうになつたら全速力で逃げるけどね。

「ほう。こちらの事はもう調べ済みと言つたところかのう」

「まあね。そちらの情報を一通り頭に入つてる。こちらの事は君には関わりがない事なんだから大人しく退散して欲しいものなんだけど……大人しく帰つてくれたりしないかい？」

こちらとしては強硬手段にあまり出たくないし、こんなところで暴れれば確実に騒ぎになる。それは僕の望むところではない。

「お主と鬭う気はこちらにない。最悪の場合、儂と我が主様はお主に殺されてしまうだろうからのう」

「なら帰つてくれ。こちらとしても君たちを殺したくはない」

「……そうじやな。今日は帰らせてもらう」

金髪の少女が完全に立ち去り、この場には僕だけとなつた。本当に少女のような姿だつたな。あれが力を奪われている今の姿なんだろうが……さすがにあれはすごいな。

「まあ……無事に生きていそうで良かつたと喜ぶべきかもしれないな。あの女への土産が増えそうだな」

伍話

金髪の幼女がここを離れて一時間近くが経過しただろうか。後、二時間もすれば貝木との約束の時間になる。まだ予想以上に時間があるために僕は適当に町を徘徊してみる事にした。

だが、貝木が僕に相談をするなんて事があるとは……貝木は自分の事を人に話す事をあまり好まない人なのに僕に相談をしようとするなんてこれは大きな変化だ。

これは良い変化と言うべきか：それとも悪い変化と言うべきか。まあ、どちらにせよ貝木が態態、僕に話すような内容だからかなり面倒な案件なのは聞かなくとも確定と考えるべきかもしれない。

そんな事を頭で考えながら僕は町を徘徊していた。

前から中学生らしき女子の二人組がこちらに向かつてきている。その二人の女子の内、一人には見覚えがあつたがどこで会つたかは思い出せない。あんまり物覚えが良い

方ではない僕だから仕方ないかもしない。

「それでね…公園で会った人がね……」

「そうなのか…」

すれ違いながらそんな事を話しているのが聞こえてきた。声を聞いても誰だか思い出せないのでから見覚えがあるというのには僕の見間違いかかもしれない。

「あの…」

後ろを振り返るとさつきすれ違った女子のうち一人の女子が立っていた。やつぱりこの子、どこかで見覚えがあるな…さつきは気の性だと思っていたけどやつぱりどこかで見たことがあるんだよな。

「何だい？」

僕が威圧をしてしまったのか：なんか少女は言葉を詰まらせている感じがあった。

「あの……公園のベンチでお会いした方ですか？」

「公園のベンチ……あ、あの時、彼氏を待つてた子か。どうりでどこかに会つた事があると思つたんだ！」

「やっぱりそだよね。どこかで会つた事があると思つてたんだよね」

急にため口のような口調になりだしたが……僕はそこまで彼女と親しいわけではないんだけど。今の若い子はこんな感じなのか……恐れを知らないとはこの事を言うんだろうな。君は不死鳥で僕は吸血鬼。絶対に相容れない者同士が今、ここに相容れてい る。

「もう一度会うとは僕も思つていなかつたよ。それで態態、話しかけてきたという事は何か僕に用があるのかい？」

「ううん。そういうわけじやないんだけどお兄さんともう少しお話してみたいなと思つて」

この子はもうちょっと警戒心というものをもつた方が良い。このまま成長していくと思うと恐怖すら抱いてしまう。

「……僕は別に良いけど……」

「それじゃ行こう!!」

少女は片手をあげて僕の前を歩いていく。本当に第一印象と違つて……わんぱくな少女だな。僕一回ため息をついて少女の後に付いていくことにした。

「お兄さんは仕事でこの町に来たの?」

「まあ、 そうかな」

「そ う な ん だ」

「君の方こそ彼氏とはあの後、 うまくいったのかい?」

あそこまで楽しみにしていたのだから、 聞かなくても楽しかつただろうけど聞いてみる事にした。

「…………うん…………まあまあかな…………」

なんか歯切れが悪いような感じだと思つたけどそれを口に出すのはマズイと思い口に出す事はなかつた。

「そ う か…………それで君はいつも話したことあると思つた人に今日みたいに声を掛ける

の？掛けているんだとしたらそれは長年生きている僕からのアドバイスとして止めた方が良いよ。この世には色々な人がいるからね』

「…今回が初めてだよ。それにさすがに誰にでも声を掛けるわけじゃないよ』

「それで僕に何を話したいの？君が僕に興味を持つようなどころは無かつたと思うんだけどな』

記憶を思い返したとしても心当たりが全くと言つて良いほどない。

「これと言つて決まつたことを話したいわけじゃないよ。私は只、お兄さんともう一度お話をしてみたかったんだよ。あの時はほとんど会話が出来なかつたからね』

何でもう一度話したいと思つたのか僕には全然分からぬ。でも、前を歩いている少女はどこなく笑みを浮かべているように見えた。

何故、笑みを浮かべているのかは分からぬが……笑顔はやつぱり良いと思つた僕
だつた。